

## 短期遊學對異文化感受性之影響 —以日本 H 大學之日語・日本文化遊學團為例

鄭加禎

世新大學日本語文學系 副教授

### 摘要

為因應國際化之發展，大專院校中短期海外遊學課程與日俱增。短期海外遊學乃是國際教育的延伸，因此有必要評估其學習效果。本研究以量化及質性調查法，調查了參加者於遊學前及遊學後異文化溝通能力之變化。

異文化溝通能力包含語學能力、文化知識、社會適應等，範圍非常廣汎。本研究以「異文化感受度」之變化為中心進行調查分析。研究結果顯示，參加者在遊學結束後，對異文化所帶來的壓力及不安感降低；且接觸異文化之積極度有所提升。

關鍵字：海外短期遊學、異文化能力、研修效果、異文化感受性、日語研修

# **Impacts of a Short-term Overseas Study Tour on College Students' Intercultural Sensitivity-A Case Study of H University in Japan**

Chia-Chen Cheng

Associate Professor, Department of Japanese Language and  
Literature

Shih Hsin University

## **Abstract**

With the increasing popularity of short-term overseas study tours as ways to promote international education encouraging diverse aspects of learning, it is necessary to assess the effectiveness of these programs. This study used a mixed method, quantitative and qualitative, to investigate the changes of a group of Taiwanese students' intercultural sensitivity at the end of a short-term overseas study tour organized by H University in Japan. The results showed a decrease of the participants' pressure and anxiety and a much greater participation in different cultures.

**Keywords:** short-term abroad study, intercultural ability, learning effect, intercultural sensitivity, Japanese language program

# 短期研修における異文化感受性の変化 ー 日本 H 大学の日本語・日本文化研修団を例として

鄭加禎

世新大学日本語文学科副教授

## 要旨

ますますの国際化を対応するために、多くの大学では海外への短期研修を課程の一部として取り入れている。課程としての海外短期研修は国際教育の延長であるため、学習効果の評価は不可欠なことであると思われる。本研究は短期研修の学習効果を理解するために、量的調査法および質的調査法を併用し、参加者が研修前と研修後における異文化コミュニケーション能力の変化を調べた。

異文化コミュニケーション能力といえば、語学能力、文化知識、社会への適応など広範囲に渡っているが、本研究は参加者における「異文化感受性」の変化に着目し分析した。その結果、研修後参加者が異文化に対する不安感が下がり、より積極的に異文化社会の人と接しするようになったという研修の効果が明らかになった。

キーワード：海外短期研修、異文化能力、研修効果、異文化感受性、日本語研修

## 短期研修における異文化感受性の変化 ー 日本 H 大学の日本語・日本文化研修団を例として

鄭加禎

世新大学日本語文学科副教授

### 1. 初めに

グローバル化の規模が広がりかつ迅速に進んでいる現今においては、国際人を育成する際に異文化コミュニケーション能力が要求されている。多くの民間の語学センターや塾では外国語能力および異文化コミュニケーション能力を高めることを目的として短期海外研修をプロモーションしている。また、ますます高度な国際化に対応するために、高等教育機構でも海外協定校への短期研修を国際教育の一環として積極的に取り入れている。

民間の語学センターや塾の行っている海外短期研修は一種のビジネスと見られるもので、研修が無事に終わったら引き取りが完成され、実際の研修効果についてはあまり問題視されていない。しかし、教育機構で展開される海外短期研修の目的は教育にあるため、参加者の研修効果について論じる必要があると考えられる。Rooney (2002)は研修効果の評価は必要不可欠なものであり、もし評価がなかったら学校主催の短期研修は民間の語学センターや塾で宣伝されるものと大差ないとまでいう。したがって、教育機構で行われる海外短期研修の効果評価は研修その一部であり、大きな課題だといえよう。それだけでなく、

研修効果の評価は研修の意義付けや研修内容の改善、参加者のサポートなどを効果的に提供するためのヒントにもなると思われる。

「異文化コミュニケーション能力」の向上が海外短期研修の主要な目的であるとした場合、「研修の効果」とは参加者の能力の向上という観点から評価されなければならない。では、その「異文化コミュニケーション能力」とは具体的に何のことだろうか。これに対してはさまざまな議論が存在するが、「情緒」、「認知」、「行動」という3つの概念に基づく定義がもっともよく提起されている（Chen & Starosta 2000、徐 2012）。Chen & Starosta（2000）によれば、「情緒能力」とは異文化を理解しようというモチベーション、あるいは実際に異文化を受容する、という「異文化感受性」である。「認知能力」とは異文化の存在に気付く知識能力であり、「行動能力」はコミュニケーションの目標を達成できる能力であるという。このように「異文化コミュニケーション能力」は言語能力を含む、異文化に属する他者との関わりに必要な能力の全般という総合的で大きな概念である。

本研究は現地での異文化接触による情緒面の変化を第一歩として、研修に参加した学生の「異文化感受性」を検討することとしたい。

## 2. 先行研究

### 2.1 理論研究

「異文化感受性」の測定についてもっともよく利用されているのが Bennett(1993)の「異文化感受性発達モデル (DMIS : Developmental Model of Intercultural Sensitivity)」である。Bennett は「異文化感受性」と個人が異なる文化に対する世界観を同義的に捉えて、「異文化感受性」とは、個人が自文化中心主義的な枠組みから文化相対主義的な枠組みへと変化していく、そのプロセスの発達であると主張した。そして Bennett は「異文化感受性」の発達プロセスを以下の 6 段階に分けて、個人の世界観がどの段階まで発達しているかを測定することによって、異文化感受性の変化を説明している。

- (1) 違いの否定 (Denial) : 文化差への意識はまだは発達されていない段階。
- (2) 違いからの防衛／逆転現象 (Defense／Reversal) : 文化差を意識しているが、異文化は危ないもの、劣っているものと捉えている。または逆に自文化に対して適応できなくなったり、または劣っているものと思ったりする段階。
- (3) 違いの最小化 (Minimization) : 自文化と異文化との共通点にだけ目を置いて評価する段階。
- (4) 違いの受容 (Acceptance) : 文化の多様性をポジティブに評価する段階。
- (5) 違いへの対応 (Adaptation) : 自分を相手の文化に適応させる段階。
- (6) 違いの統合 (Integration) : 自文化と異文化を一つにして第三文化を作り出す段階。

以上の(1)-(3)までは自文化をバロメーターとして異文化を判断する自文化中心主義的な枠組みに位置する段階であり、(4)-(6)は異文化の独自性を認める文化相対主義的な枠組みに入っている段階である。

このように Bennett の言及している「異文化感受性」には「情緒」、「態度」、「行動」の側面が包含されており、それは Chen & Starosta (2000)、徐 (2012) など多くの学者の提起した「異文化コミュニケーション能力」と同義的に扱われているものである。しかし、Chen & Starosta (2000) によると、異文化接触における「情緒」、「態度」、「行動」は互いに関連性があるが、異なる概念である。それらの能力を高めるにはそれぞれトレーニング方法があり、そのため、研究に当たってこの3つの概念を分けて考えなければならないという。また、Chen & Starosta は「異文化感受性」を測定するには、範囲を限定して確実に信頼性のある尺度を開発する必要があると主張している(p.3)。Chen & Starosta は「異文化感受性」とは相手を好意的に理解し、文化差に対しポジティブに考える能力であると定義し、そして(1)自尊心(2)反省心(3)開放的心(4)感情移入(5)相互作用の参加(6)評価しないという6つの要素で成り立つと考えた。さらに Chen & Starosta は上記の定義に基づき「異文化感受性尺度」を開発した。

上述の Bennett の枠組みには大きな概念が包含されており、かつ本研究の取り扱った海外研修は短期研修のため、段階的な変化に対する考察が難しいという限界が存在するため、本稿で

は最もよく利用される Bennett の 6 段階概念の代わりに Chen & Starosta (2000) を研究の枠組みとして用いることにした。

## 2.2 実証研究

短期研修に関する実証研究はビジネス観点、社会学観点および教育観点といった 3 つの分野に大別できる。

ビジネス観点からの研究では研修のマーケティング分析に着目しているものが大半である。そのうち調査規模が一番大きいのは呉宗瓊・鄭秀怡(1997)であった。呉宗瓊・鄭秀怡は台湾北部の 800 名の大学生を対象にして、短期研修マーケットの特徴を調べた。呉宗瓊・鄭秀怡によると、一番人気のある研修国はアメリカで、カナダがそれに次ぎ、そして、オーストラリア、ヨーロッパ圏、日本という順であった。研修期間は 2-4 週間のものが大半で、参加者は女性が 7 割以上を占めている。そして学生の大部分は自分の専攻と関わる国を研修国として選択しており、日本語・日本文化研修の参加者には日本語専攻の学生が多かった。その他、曾祺(2011)が海外研修を商品と位置づけ、インタビュー調査を通して学生の異文化想像、および短期研修における文化的な意味をを考察した。曾祺(2011)によると、短期研修は文化差を商品化にするビジネスであり、これを購入した学生が越境を通して異文化知識を得る。そして海外で得た異文化経験は研修後も実践しつづけられるものなので、持ち帰れる文化商品だと述べている。

一方、社会学の視点からの研究は多くはないものの、海外短期研修の意味を深く分析している。葉秀燕(2008)は参与観察を

行い、ロンドンとケンブリッジ大学の研修団に参加した台湾大学生の観光、買い物行動を考察した。葉秀燕(2008)によると、学校教室という固定した空間における学習枠が空間の移動により破壊されるので、研修者は旅行者、消費者として、異文化社会で新しい言語学習ルートを構築するという。いわば、研修者は観光、買い物、見学などの社会参加を通して言語知識を身体で改めて確認し、再構成するのである。また、葉秀燕(2008)によると、異文化との触れ合うことにより、参加者は研修中だけでなく、研修後も研修国文化への高い関心を持つこととなり、帰国後も異文化接触が続いているという。このように葉秀燕(2008)と曾棋(2011)は海外短期研修が時間的には短いが、学生に対する影響が研修後も継続されていると主張し、研修における長期効果を強調している。

教育観点からの先行研究には城・池澤等(2011)、張淳恵(2005)、澤崎(2009)、Chiang (1998)などがある。まず、城・池澤等(2011)はイギリス、アメリカ、中国、台湾などから日本へ4週間の夏季研修に参加した研修生を対象とし、海外短期研修が異なるレベルの日本語学習者にもたらす効果を調査した。その結果、初級クラスの研修生は文法と作文の能力が上がり、中級クラスの研修生には文化体験活動よりも教室での学習が好まれ、一方、上級クラスの研修生は友達ができて、異文化理解能力が上がったという。次に、張淳恵(2005)は台湾の中学生を対象にアメリカへの短期研修効果を調べた。張淳恵の調査では研修後、学生の学習態度および積極性が良くなったが、実際の英語能力

に反映できていないという結果であった。また Chiang (1998)は 4 週間のアメリカ短期研修の効果を研究するために、台湾 5 年制専門学校の学生を対象にして 3 年間のデータを集めて調査を行った。Chiang によると、英語能力については「聴解」の項目にのみ顕著な効果が見られた。「心身における適応」、「異文化理解」、「プログラムへの満足度」などは 2 週目で一番いい効果が現れて、4 週目に入ってから効果の鈍化現象が出始めたという。Chiang(1998)の研究は研修効果は時間によって変わるものであることを示唆している。また、澤崎(2009)はアメリカから日本へ 4 週間の短期研修に参加した 4 人の高校生を対象に、彼らの日本語学習および日本の大学生との交流について質的研究を行った。澤崎によると、学生たちの日本語会話能力が上達し、異文化理解能力も高まった。澤崎の調査したプログラムの特徴は他の短期研修に比べて旅行や文化体験の時間が少なく、日本語の授業および日本人学生との交流時間が多かったという点にある。

上記の先行研究を概観すると、短期研修は女性の参加者が多く、日本語研修に参加したのは日本語学科の学生が多かった(吳宗瓊・鄭秀怡 1997)。参加した後、語力が高まったかについてはまとまっている結果はなかった。城・池澤等(2011)、張淳恵(2005)などでは研修による外国語能力向上は見られなかったと分析されているが、Chiang (1998)、澤崎 (2009) では参加者の語学力は研修を通して高まったという。これはおそらく短期研修のプログラムの内容と関わっていると推測される。他方、短期研

修は異文化理解および自己成長につながっているという一致した分析が見られた（Chiang 1998、葉秀燕 2008、城・池澤 2011、曾棋 2011）。

このように台湾における短期研修に関する研究には英語研修を調査したものは多く、日本語研修のものは現時点では見られない。一方、日本においては、日本語研修に関する調査があるが、台湾人を対象にする研究はまだないようである。私見では、台湾の大学生の海外日本語研修の効果についての理解を深め、研修効果をあげるために調査を行う必要があると思われる。

### **3. 研究方法**

#### **3.1 研究対象**

日本の H 大学は、毎年、夏休みと冬休みに 2 週間の「日本語・日本文化文化研修団」、いわゆる外国人向けの短期研修プログラムを実施し、台湾人大学生のみのプログラムも組んで、台湾の協定校で研修生を募集している。本研究の調査対象となったのは 2012 年から 2014 年にかけて、H 大学の主催した短期研修夏季プログラムに参加し、それに調査に協力できた台湾の大学生である。参加者には日本語専攻と非日本語専攻の学生がいるが、日本語専攻の学生が多数を占めているため、コーディングのため今回の調査は日本語専攻の学生に限定した。本研究に協力した学生は 75 名で、彼らの所属学校は北部にある K と S 大学および中部にある I 大学、南部にある B と T 大学の 5 校である。

#### **3.2 プログラムの紹介**

H 大学の主催した「日本語・日本文化文化研修団」は実施内容が参加人数によって微調整されるが、概ね下記の構成で行われている。

団体授業：日本語の授業－文法や語彙に関する語学教育。8 回  
×1.5 時間

日本文化の授業－折り紙、日本の武道など社会文化に関する授業。9 回×1.5 時間

相互交流：グループを分けて日本人学生と交流する活動。13 回  
×1.5 時間

見学旅行：日帰り旅行 2 回、一泊二日旅行 1 回

その他：開講式、終了試験、終了式、送別会

2 週間の研修のうち、研修学校に滞在する 10 日間において相互交流の時間が設けてあり、相互交流は研修の重点と言える。

### 3.3 調査方法

本研究では量的研究法および質的研究の長短所を補い合うために、アンケート調査法と面接法を併用して調査を行った。

アンケート調査法については 1 名の協力者につき、研修前と研修後に「異文化感受性」に関する質問紙を配布し、計 2 回の調査を実施した。

質問紙の内容は「異文化感受性」および調査対象に関わる質問の 2 部から成り立っている。アンケート調査に使用した質問項目は 2.1 で紹介した Chen & Starosta (2000) の開発した「異文化感受性尺度 (Intercultural Sensitivity Scale; ISS)」を基にし

て修正を加えたものである。Chen & Starosta の「異文化感受性尺度」は 44 問あるが、彼らは 414 名のアメリカの大学生を相手に因子分析で調査を行った結果、44 問の中から整合性の高い質問を 24 問抽出した( $p < .05$   $\alpha .86$ )。本研究は Chen & Starosta(2000) の「異文化感受性尺度」24 問バージョンを修正してアンケート調査の尺度にした。そして「とてもそう思わない」、「そう思わない」、「どちらともいえない」、「そう思う」、「とてもそう思う」の 5 件法でたずねた。調査対象者の日本語レベルにはばらつきがあるため、全員に質問紙の内容を理解してもらうために質問紙は中国語で作成した。

分析にあたって、まず全体のデータに因子分析を行って、因子分析で抽出した各因子に対して研修前と研修後の平均数を  $t$  検定で比較した。面接調査については、研修後インタビュー調査の協力者を募集した結果、6 名の参加者の承諾を得た。そしてこの 6 人の参加者に中国語でインタビューを行った。参加者のストレートな感想を聞かせてもらいたいため、問題の方向設定を最小限にし、「短期研修で気づいたこと」、「印象深いこと」、「勉強になったか」、「自分の変化」という大まかな枠の質問を設定し、自由回答してもらった。また、面接から得たデータに対して内容分析を行った。

## 4. 調査結果

### 4.1 回答者の属性

研修前と研修後にそれぞれ質問紙を 75 部配布し、研修前に 65 部、研修後に 70 部回収できた。

回答者の属性は表 1 にまとめた。表 1 に示したように、今回の調査においては男性が 20%(前：13 名，後：14 名)、女性が 80%を占めている(前：52 名、後：56)。この割合は日本語学科における男女の割合と大体一致している。次に回答者の日本経験を見ると、90%ぐらいの学生にとって H 大学における日本語研修が始めての日本経験であることがわかった(前：無経験 61 名 93.8%、後：無経験 63 名 90%)。また、回答者の学年については散在しているように見えるが、一年生の回答者は全員科技大学の学生で、高校から日本語を勉強し始めた学生たちである。全体から見ると、3 年生と 4 年生の回答者はそれぞれ 30%以上の割合であった(3 年生：研修前 24 名，研修後 24 名；4 年生：研修前 19 名、研修後 23 名)。

表 1 回答者の属性

		研修前の回収データー（65 名）			研修後の回収データー（70 名）		
		男（名）	女(名)	計	男(名)	女(名)	計
日本経験	無解答	0	0	0(0%)	0	1	1(1.4%)
	有	0	4	4(6.2%)	1	5	6(8.6%)
	無	13	48	61(93.8%)	13	50	63(90%)
	計	13(20%)	52(80%)	65(100%)	14(20%)	56(80%)	70(100%)
学年	無回答	0	2	2(3.1%)	0	0	0
	一年生	6	6	12(18.5%)	5	8	13(18.6%)
	二年生	2	6	8(12.3%)	2	8	10(14.3%)
	三年生	4	20	24(36.9%)	6	18	24(34.3%)
	四年生	1	18	19(29.2%)	1	22	23(32.9%)

	計	13(20%)	52(80%)	65(100%)	14(20%)	56(80%)	70(100%)
--	---	---------	---------	----------	---------	---------	----------

#### 4.1 因子分析の結果

質問紙における「異文化能力尺度」の 24 項目について因子分析（主成分分析法、Varimax 回転）を行った。因子負荷量が 0.5 未満の項目 1. 2. 10 を除き、最終的に 21 項目が残って 5 因子が抽出された(付録 1)。

第一因子は項目 4.9.12.15 で構成され、いずれの項目も異文化に接触するときの悩みや不安と関わっている内容なので「ストレス感受」と命名した。第二因子の構成項目は 7.8.16.18 であり、異文化の価値観や異なる行動への態度を記述するものなので、「異文化尊重」と名づけた。第三因子は 11.13.14.17.19.21 から成り、これらの項目は相手に対する寛容的な行動と関わっているものなので、「思いやり」と命名した。第 4 因子は項目 22.23.24 によって構成され、項目内容が異文化接触の熱意の有無と関連しているので、「積極性」と名づけた。最後の第 5 因子は 3.5.6.20 から成り、これからの項目は異文化に直面するときの能力、自国文化に対する印象を聞いているので、「異文化交流への自信」と命名した。このように本研究の調査内容は「1.ストレス感受」、「2.異文化尊重」、「3.思いやり」、「4.積極性」、「5.異文化交流への自信」といった 5 つの概念に集約できる。

#### 4.2 「t」検定の結果

因子分析によって抽出した 5 因子に対して、研修前と研修後の 2 群別にして 2 群間で「t 検定」を行ったところ、有意差の現れたのは「1.ストレス感受」と「4.積極性」の 2 因子であっ

た（表 2）。「1.ストレス感受」においては研修後は研修前よりも低い結果であった。それに対して「4.積極性」においては研修後に研修前よりも高い数値が現れた。そして「2.異文化尊重」、「3.思いやり」、「5.異文化交流の自信」においては有意差は出なかった。言い換えると、研修を経て参加者はより気軽に、積極的に異文化コミュニケーションに参加するようになった。

表 2 研修前と研修後の平均値比較

	研修前		研修後		比較 結果	有意 確率
	平均値	標準 偏差	平均値	標準 偏差		
1 ストレス感受	2.78	.61	2.53	.76	-.26	*.032
2 異文化尊重	4.36	.49	4.39	.57	.024	.791
3 思いやり	3.94	.48	4.00	.50	.061	.480
4 積極性	4.20	.53	4.38	.50	.177	*.048
5 異文化交流の 自信	3.15	.54	3.23	.59	.087	.382

(\* $p < .05$ )

### 4.3 面接調査の結果

研修参加者の 6 人に面接調査を行った結果およびその結果に沿う概念分類を下記にまとめた。

① A 女性 S 大学一年生 日本語学習歴：2 年 日本経験:8 回

言及内容	概念分類
日本を7回も旅行した。今回は日本人のライフスタイルを理解したり、日本で学生生活を体験したりするためにこのプログラムに申し込んだ。祇園祭の見学がとても面白かった。大学での浴衣祭りも参加した。	社会文化への注意
一番勉強になったのは会話だ。日本人学生との交流が面白かった。最初の2、3日は日本語が出てこなくて落胆していた。6、7日経ったら、すこしずつ話す勇気が出て日本人学生と簡単な会話ができるようになって友達もできた。他の大学からの研修生にはすでにN2やN1に合格した人がいる。彼らはぺらぺら喋れるので、交流に来た日本人学生がよく彼らと話していた。でも、私の下手な日本語を聞いてくれた親切な日本人学生もいる。	日本語能力の上昇 交流の面白さ 挫折感の緩和
研修が終わった後もフェイスブックで彼らとやり取りをしている。聞くことと話すことが前よりも上達したと思う。	日本語能力の上昇
台湾ではパターン化された会話しか勉強していなかったが、日本では自然な会話に触れることができたのでよかったと思う。日本人の話し方が教科書に載っているものと違うことに気づいた。短期研修はとても勉強にな	教室会話と自然会話との差異

った。	
日本人は社会秩序をよく守る。例えば、食堂には人が多いが、うるさく感じない。みんなお喋りしているとき、声量を控えているからだ。町が綺麗で、ごみが少ない。	社会文化への注意
今回は初めて親を離れて外国で2週間生活したので、自立心が養われたと思う。	自己成長
より会話力を高めるために、これから教科書以外のことも勉強したい。	学習観の変化

② B 男性 S 大学一年生 日本語学習歴：2年 日本経験：3回

言及内容	概念分類
日本人との交流が面白かった。自然な会話を聞いて、実際に日本語を使うことができた。これが一番勉強になったこと。教室で勉強したものとは違う。	交流の面白さ 教室会話と自然会話との差異
最初は言葉が出てこなくて挫折があったが、だんだん和らいだ。	挫折感の緩和
日本では信号がないところでも歩行者優先だ。私は慣れていなくて車が止まってくれても道を渡るのをためらった。	社会文化への注意
研修を経て自信がついた。会話の時の不安が少なくなった。これから一人で日本へ行ける自信がある。	自信

③ C 男性 K 大学 2 年生 日本語学習歴：2 年 日本経験：1 回

言及内容	概念分類
<p>最初はとても緊張した。日本人学生と話すとき簡単な挨拶もできなかった。実はできなかったのではなくて、声をかけられた瞬間ことばが出てこなかったのだ。おかしいと思う。自分は本当に日本語を勉強していたのだろうかと思った。3、4 日経ったら交流に来てくれた日本人学生と会話ができるようになった。学校で勉強した文型を一所懸命に思い出して使おうとした。2 週間目に入ったら自ら声をかけることができた。通じないときは紙に書いてコミュニケーションを取るようになった。</p>	<p>挫折感の緩和</p> <p>コミュニケーション方法の切り替え</p>
<p>旅行が楽しかった。神社でおみくじを引いたりして、自分が旅行番組に出演しているみたい。古い建物や自然がよく守られていてとても感心した。日本はいい所が、食べ物はやっぱり台湾のものがおいしい。</p>	<p>社会文化への注意</p>
<p>これからもっと真面目に勉強したい。いままでの勉強方法はどこかに問題があるかもしれない。聴解と会話の勉強にもっと役にたつ方法はないか。また日本に来たい。今度来たとき日本人とたくさん話せるように頑張ろうと思う。</p>	<p>学習観の変化</p>

④ D 女性 K 大学 4 年生 日本語学習歴：4 年 日本経験：1 回

言及内容	概念分類
日本人学生の考えいることは我々と違う。彼らは大きな夢を持っている。X 君は将来本を出したいという。Zさんは外国へ行ってボランティアをしたいという。私は4年生だけど、台北で就職するか田舎に帰って仕事を探すかぐらいのことしか考えていない。どちらも大学生なのに、なんと自分の視野が狭いのだろう。2週間の交流を経て、いままでの人生を考えなおしたいと思った。研修に参加してとても勉強になった。世界が広いと実感した。	反省          自己成長
私は N2 の資格を持っているが、日本のことについてはあまり知らない。台湾のこともあまり知らない。台湾のことを聞かれても答えられなかった。特に数字に関わること、例えば、台湾の面積や台北の人口などがわからなかった。わたしはナイトマーケットや台湾料理のことしか紹介できなかった。自分の足りないところが分かった。	反省
2 週間の研修だけど、聴解と会話能力がよくなったと思う。毎日日本語をたくさん聞いたり喋ったりしたからだ。以前はまず頭の中で文法、	日本語能力の 上昇

<p>文の構成を考えてから日本語を話し始めていたが、研修中は日本人学生と会話するとき、すぐ反応しなければならないので、まず知っている単語を話し、そしてちょっとジェスチャーや表情を加えてコミュニケーションを取っていた。まともな文になっていないが案外に通じた。</p>	<p>コミュニケーション方法の変更</p>
--	-----------------------

⑤ E 女性 K 大学 4 年生    日本語学習歴：3 年    日本経験：1 回

言及内容	概念分類
<p>浴衣を着て散策したのが忘れがたい体験です。日本人は伝統を大事にしてとてもいいと思う。台湾には伝統的なイベントはあまりないような気がする。</p>	<p>社会文化への注意</p>
<p>日本人学生との交流が一番面白くて勉強になった。日本語をたくさん話した。私は会話のクラスで発言することはあまり好きではないけど、研修中は日本語をたくさん話したかった。</p>	<p>交流の面白さ</p>
<p>言いたいことが言えないとき、身振り手振りをしたり紙に漢字を書いたりしてコミュニケーションを取っていた。他校の学生はとても上手で、私は勉強が足りなくてちょっと劣等感があるけど、ずうずうしく大げさな身振り手振りでやっていたので友達が何人もできて嬉しかった。</p>	<p>コミュニケーション方法の切り替え  挫折感の緩和</p>

た。最初のときは自分が変な日本語を話したらどうしようと心配したが、相手と友達になったら気軽に喋るようになった。	
日本人が日常生活で使う日本語は教科書に書いてあるものとは違う。台湾に帰ったらドラマを見て勉強しようと決心した。	教室会話と自然会話との差異 学習観の変化
日本の男子学生は眉を整えている人が多い。台湾の男性にはあまりそういう人はいない。	社会文化への注意

⑥ F 女性 S 大学 3 年生 日本語学習歴：2 年 日本経験：1 回

面接の言及内容	言及内容の概念
日本人の学生と他校の研修生の友達ができとても嬉しかった。日本人の学生はバイトの形でわたしと交流しに来ただけけれども、毎日交流の時間が終わっても、彼らは大学周辺を案内してくれて、とても熱心だった。午前の授業は内容が難しくて分からないことが多かったが、午後の交流や休日の旅行はとても楽しかった。	交流の面白さ
最初は先生と日本人学生の尋ねた簡単な質問にすら答えられなくて悩んでいた。相手が大学や台湾のことについて訊いているのはわかったが、台湾から出発する前に日本語の自己紹介	

や台湾のことについてちょっと準備してきたのに答えられなかった。何日か経ったら、交流の時間に自分の調べた台湾のことを日本語で話して、すこし達成感を得た。そして日本語で会話する勇気も湧いてきた。研修が終わって台湾の空港に帰ってきたとき、空港のスタッフに「すみません」と言った。日本語の環境に慣れて、言葉の切り替えを忘れた。	挫折感の緩和
日本は物価が高いといわれているが、何でも高いわけではない。交通費が台湾よりずいぶん高いけど、手ごろな価格で買える生活用品や服もたくさんある。	社会文化への注意
旅行がすごく印象ぶかい。行ったところがとても綺麗でゆっくり散策したかった。日本人が伝統を大切に守っていることを見習うべきだと思う。今度は個人旅行でじっくり観光したい。	社会文化への注意
今回の研修によって日本語会話力を上昇させただけでなく、日本での生活方法も分かるようになって、視野も広がった。	日本語能力の上昇 自己成長

上記の内容にそって半分以上の面接協力者が言及した概念を表3にまとめた。表3から分かるように、これらの概念はある

程度参加者の所感を示しており、越境の効果を看取できる。その内、「ア.挫折感の緩和」、「イ.社会文化への注意」、「ウ.交流の面白さ」、「エ.自己成長」、「オ.コミュニケーション方法の切り替え」は非言語領域であり、言語領域と関わっている内容は「カ.教室会話と自然会話との差異」、「キ.日本語能力の上昇」、「ク.学習観の変化」である。

表 3 インタビューの結果

協力者 参加者の言及概念	A	B	C	D	E	F	人数
ア. 挫折感の緩和	○	○	○		○	○	5
イ. 社会文化への注意	○	○	○		○	○	5
ウ. 交流の面白さ	○	○			○	○	4
エ. 自己成長	○	○		○			3
オ. コミュニケーション方法の切り替え			○	○	○		3
カ. 教室会話と自然会話との差異	○	○			○		3
キ. 日本語能力の上昇	○			○		○	3
ク. 学習観の変化	○		○		○		3

## 5. 分析

本研究はアンケートおよび面接調査法を併用し、日本の H 大学で主催した短期研修に参加した学生を対象に「異文化感受性」の変化について調査を行った。アンケート調査の結果によると、本研究の取り扱った「異文化感受性」は「1.ストレス感受」、「2.

異文化尊重」、「3.思いやり」、「4.積極性」、「5.異文化交流の自信」といった5つ因子から成りなっている。さらに抽出した5因子に対して研修前と研修後の2群に分けてt検定で比較したところ、「1.ストレス感受」と「4.積極性」の2因子において有意差が示された。研修後、参加者は感じたストレスが少なくなり、そしてもっと能動的に異文化交流に取り組みたくなったという結果であった。一方、面接調査では、参加者は研修に対して「ア.挫折感の緩和」、「イ.社会文化への注意」、「ウ.交流の面白さ」、「エ.自己成長」、「オ.コミュニケーション方法の切り替え」、「カ.教室会話と自然会話との差異」、「キ.日本語能力の上昇」、「ク.学習観の変化」という気づきおよび感想を述べた。これらの8項目の概念ではア-オの5項目が非言語領域に属し、カ-クの3項目は言語領域に入るものである。

アンケート調査と面接調査の結果を合わせて分析すると、いくつかの共通点が見られた。まず、アンケート調査で有意差の出た「1.ストレス感受」と「4.積極性」については、面接調査でも関連した結果が示された。因子「1.ストレス感受」が少なくなることと面接協力者の言及した「ア.挫折感の緩和」というの内容は、いずれも参加者が異文化接触による精神的な負担が研修によって緩和されたことを意味している。さらに面接調査では精神的な負担が緩和されたら日本語がすこしずつ話し始めるようになった（協力者 A,C,E,F）という傾向が表れた。次に、因子「4.積極性」は面接で得られた「イ.交流の面白さ」、「オ.コミュニケーション方法の切り替え」という内容と関わってい

ると考えられる。ここには参加者は日本人学生と交流するために、言語や非言語など複数の手段を利用したあと、交流の面白さを体験し、研修後もっとポジティブな態度で日本人学生とコミュニケーションを取ろうとする研修効果が示された。

一方、アンケート調査において「2.異文化尊重」、「3.思いやり」、「5.異文化交流の自信」の3因子には有意な差は見られなかった。これらの因子については面接調査では協力者のBが自分に自信がついたと言及した以外、あまり触れられなかった。まとめていうと、本研究におけるアンケート調査と面接調査の結果はだいたい合致している。

また、「1.ストレス感受」、「4.積極性」の2因子における変化は、いずれも対面コミュニケーションによる効果だと考えられる。Chen & Starosta (2000) によると異文化感受性は「自尊心」、「反省心」、「開放的心」、「感情移入」、「相互作用の参加」、「評価しない」からなるが、この枠から言うと、本研究の対象者は研修を通して「相互作用の参加」、「開放的な心」という側面がよりいい方向へ変化した。H大学の短期研修プログラムでは、相互交流の時間が多く設けられて、本研究の調査結果によればその成果が現れたといえよう。一方、Chen & Starostaの述べた「自尊心」、「反省心」、「感情移入」、「評価しない」という異文化感受性の側面については、面接調査協力者Dが自己反省のことを言及した以外、客観的な考察ができなかった。それらの側面は自他文化への理解や文化相対性と深く関連している概念なので、派遣側は自他文化の特徴および異同について事前教育と

して導入したり、または主催側はそれらの概念を研修プログラムに取り入れれば、さらなる全面的な「異文化感受性」を高めることができると考えられる。

## 6. 終わりに

先行研究では研修の効果について様々な結果が提出されているが、それはおそらく研修プログラムの設計と深く関わっていると考えられる。本研究において、H大学の短期研修参加者が日本人学生との盛んな交流によって「ストレス感受」、「積極性」という側面の異文化感受性がよい方向へ変化した結果が見られた。

面接調査において、参加者が述べた今後の学習観の変化やFBでの日本人学生とのやりとりは、まさに葉秀燕（2008）と曾棋（2010）が言及した短期研修の継続効果だといえよう。しかし、実際参加者がどのように短期研修で得た経験を帰国後の学習に応用しているか、その効果が一時的なものなのかどうか、学生の地域的差異があるのかという点については問題として残っている。これについては今後課題にしたい。

また、日本語・日本文化短期研修を学校教育の延長線としてより有意義なものにするために、研修効果を評価しそして評価の結果に基づいて、事前・事後教育および指導教員の役割の検討が必要だと思われる。

## 参考文献

張淳惠『遊學對國中生英語學習態度與英語學習成效之影

- 響』靜宜大學觀光事業學系研究所碩士論文、2005。
- 吳宗瓊、鄭秀怡「台灣遊學特質之研究」『觀光研究學報』  
第3卷第2號、1997、35-45頁。
- 葉秀燕「血拼英國 台灣遊學生英國血拼的觀光消費究」  
『研究台灣』第4號、2008、43-79頁。
- 曾祺『跨國的觀光文化產業－以台灣美國遊學團的生產與  
遊學生消費經驗為例』東華大學觀光暨休閒遊憩學系碩士論  
文、2011
- Bennett, M.J. Towards Ethnorelativism: A Developmental  
Model of Intercultural Sensitivity. In M. Paige (Ed.)  
Education for the Intercultural Experience  
. Yarmouth, Me: Intercultural Press, pp. 21-71, 1993.
- Chiang, H.L. The emotional & educational effects of a  
short-term overseas students in a junior college: a case  
study. Journal of Kao Yuan Institute of Technology, 7(2),  
55-64, 1998.
- Chen, G.M., & Starosta, W.J. The development and  
validation of the intercultural sensitivity scale human  
communication, 3(1) 3-14, 2000.
- Chen, G.M., & Starosta, W.J. A review of the concept  
of intercultural awareness. Human communication  
2, 27-54, 1998-1999.
- Rooney, M.. Keeping the study in study abroad. The Chronicle of  
Higher Education, 49(13), A63, 2002.

坂田浩．福田スティーブ「効果的短期語学研修プログラム  
の開発を目指して－異文化感受性質問紙（IDI）による短期語  
学研修の効果測定」『徳島大学国際センター紀要』第 4 号年  
報、2008、1-16 頁。

澤崎宏一「『カリフォルニア州高校生のための日本語  
研修プログラ』ムにおける静岡県立大生の国際交流活動：ラ  
ンチパートナーとカンバーセッションパートナー」『国際関  
係・比較文化研究』、第 7 巻 第 2 号、2009、117-131 頁。

城保江．池澤明子等「体験型短期日本語研修における課  
題－レベル別対応の観点から」『佐賀大学留学生センター紀  
要』第 10 号、2011、67-81 頁。

徐璐「異文化コミュニケーション能力の育成－日本語教育を中  
心に」『文明 21』、第 28 号、2012、65-73 頁。

原田登美「日本語教育と文化の交差点－異文化コミュ  
ニケーションの視点から」『Language and culture』第 4 号、  
2000、120-130 頁。

#### 付録 1 因子分析の結果

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
	スト レス 感 受	異 文 化 尊 重	思 い や り	積 極 性	異 文 化 交 流 の 自 信
寄与率 %	15.65	13.68	13.53	9.60	9.0
累積寄与率 %	15.65	29.33	42.86	52.46	61.46

4. 要我在來自不同文化的人前面說話，我感到非常困難。	.738	-.079	-.090	-.146	-.096
9. 和來自不同文化的人進行交流時，我容易感到苦惱。	.820	-.171	-.178	-.057	-.081
12. 和來自不同文化的人在一起，我經常感到怯步。	.858	.016	-.089	-.128	-.190
15. 和來自不同文化的人進行交流時，我覺得自己無所是從。	.715	-.009	-.143	-.007	-.169
7. 我不喜歡和來自不同文化的人在一起。	.066	-.604	-.055	-.347	.033
8. 我尊重來自不同文化的人的價值觀。	.019	.681	.211	.168	.116
16. 我尊重來自不同文化的人的行為方式。	-.112	.616	.409	-.026	.261
18. 我不接受來自不同文化的人的觀點。	.102	-.840	-.022	-.065	.003
11. 對於來自不同文化的人，我不急於對他的印象下定論。	-.154	.409	.553	-.118	-.055
13. 我對於來自不同文化的人，保持開放的態度。	-.121	.382	.514	.368	.058
14. 和來自不同文化的人進行交流時，我非常注意觀察對方。	.007	.125	.685	.224	-.027
17. 和來自不同文化的人進行交流時，我會盡量去獲得更多的相	-.113	.434	.647	.140	.214

關訊息。					
19. 和來自不同文化的人進行交流時，我能敏感察覺出對方細微的含意。	-.248	-.187	.733	.066	.201
21. 和來自不同文化的人進行交流時，我總是給予對方正面的回應。	-.327	.234	.586	.110	.228
22. 我避免和來自不同文化的人進行交流。	.455	-.336	-.156	-.599	.073
23. 和來自不同文化的人進行交流時，我經常透過語言或肢體語言讓對方知道，我明白他在說什麼。	-.059	.021	.097	.783	.197
24. 和來自不同文化的人進行交流時，我覺得很開心。	-.120	.337	.274	.587	.034
3. 我非常確認自己可以與來自不同文化的人進行交流。	-.353	.156	.067	.345	.587
5. 與來自不同文化的人進行交流時，我總是知道該說什麼。	-.337	.071	-.051	.165	.730
6. 與來自不同文化的人進行交流時，我同樣具有很好的社交能力。	-.318	.226	.217	.228	.610
20. 我覺得我國的文化比其他國家的文化好。	.095	-.100	.236	-.275	.596

主成分分析 Varimax 法 負荷. 5 以上

負荷量が 0.5 未満で削除した因子

1.我喜歡與來自不同文化的人們進行交流。
2. 我覺得來自其他文化的人心胸很狹隘。
10. 和來自不同文化的人進行交流時，我感到很有信心。

